全学教育科目に係る授業アンケートにおける
エクセレント・ティーチャーズ
（令和4年度）

高等教育推進機構では平成２４年度から、全学教育科目に係る授業アンケート結果において、総合評点の値が上位となった専任教員のうちから次項選定基準に基づき、「全学教育科目に係る授業アンケートにおけるエクセレント・ティーチャー」として選定し、所属・職名・氏名・担当授業科目・総合評点をホームページで公表することとしている。
また、エクセレント・ティーチャーのうち、各授業科目区分の最上位者から、当該授業科目の目的・内容・実効上の取組・工夫等について報告を得て紹介する。

教員から報告された授業への取組・工夫等については、学生へのフィードバックを目的として、また、教員のＦＤや教員相互の授業参照資料として公表する。
なお、平成２３年度まで評価室が実施してきた授業アンケート結果の公表に至る検討の経緯や公表方法に関する考え方等は、平成１５年度年次報告書（第１部第２章『学生による「授業アンケート」について』）や同別冊「学生による授業アンケート結果」(PDF)を参照願いたい。

なお、授業アンケートは学生の視点からの評価であり、この指標のみが授業の質や教員の教育能力を示すものではないことを付言しておきたい。

全学教育科目に係る授業アンケートにおけるエクセレント・ティーチャーの選定基準

１．対象者

対象年度に開講した全学教育科目において、学生による授業アンケートを実施した授業科目を担当する本学の教員（非常勤講師を除く）とする。

ただし、アンケート提出者が９名以下の授業科目を担当する者は除く。

２．選定方法

学生による授業アンケート結果において、文系・理系区分及び授業科目区分ごとに総合評価の値が上位の者から、原則、別表①の選出数に基づき全学教育科目におけるエクセレント・ティーチャーとして選定する。ただし、総合評点（主要設問の評定値の平均）の値が 4.00 未満の者は除く。

なお、文系・理系区分は、担当教員の所属部局により別表②の「文系・理系区分」に基づき区分することとし、授業科目区分は、国立大学法人北海道大学全学教育科目規程（平成７年４月１日海大達第２号）第２条に規定する科目により区分することとする。

【別表①：選出数】

		一般教育演習	総合科目	主題別科目	共通科目	外国語科目	外国語演習	基礎科目	日本語科目
文系	15	2	1	4	1	3	3	1	
理系	15	4	1	1	1	2		6	

【別表②：文系・理系区分】

〈文系部局〉

法学研究科	観光学高等研究センター	高等教育推進機構
教育学研究院	アイヌ・先住民研究センター	大学院教育推進機構
メディア・コミュニケーション研究院	社会科学実験研究センター	国際連携機構
経済学研究院	大学文書館	人材育成本部
文学研究院	埋蔵文化財調査センター	安全衛生本部
公共政策学連携研究部	国際連携研究教育局	学生相談総合センター
スラブ・ユーラシア研究センター	産学・地域協働推進機構	

〈理系部局〉

水産科学研究院	獣医学研究院	総合博物館
地球環境科学研究院	情報科学研究院	北方生物圏フィールド科学センター
理学研究院	北海道大学病院	人獣共通感染症リサーチセンター
薬学研究院	低温科学研究所	環境健康科学研究教育センター
農学研究院	電子科学研究所	北極域研究センター
先端生命科学研究院	遺伝子病制御研究所	サステイナビリティ学教育研究センター
保健科学研究院	触媒科学研究所	保健センター
工学研究院	情報基盤センター	創成研究機構
医学研究院	アイソトープ総合センター	数理・データサイエンス教育研究センター
歯学研究院	量子集積エレクトロニクス研究センター	

３．その他

（１）上記２のエクセレント・ティーチャーズのうち、各授業科目区分の最上位者から、当該授業科目の目的・内容、実行上の取組・工夫等についての報告を得て紹介する。ただし、過去３年間に紹介したエクセレント・ティーチャーは除く。

（２）一人の教員が複数の授業科目区分で最上位となった場合は、全ての授業科目について報告を得て紹介する。ただし、対象者の希望により、報告・紹介する授業科目をいずれか一つのみとすることができる。

（３）上記（１）、（２）のただし書きに該当する場合、及び退職等で報告を得られない場合は、次点のエクセレント・ティーチャーから報告を得て紹介する。

（４）上記２のエクセレント・ティーチャーズのうち、各授業科目区分の最上位者を「ベスト・エクセレント・ティーチャー」とし、高等教育推進機構長より表彰する。

全学教育科目に係る授業アンケートにおけるエクセレント・ティーチャーズ（令和４年度）

	区分内順位	文系理系	授業科目区分	総合評点	※所属部局名	※職名	氏名	授業形態	必修選択	授業科目名	講義題目名	提出枚数	備考
☆	1	理系	一般教育演習	4.9	北方生物圏フィールド科学センター	准教授	河合　正人	演習	選択	一般教育演習(フレッシュマンセミナー)	牧場のくらしと自然・冬季編	13	
	2	文系	一般教育演習	4.86	高等教育推進機構	准教授	山本　堅一	演習	選択	一般教育演習(フレッシュマンセミナー)	ディスカバー北大	19	
	3	理系	一般教育演習	4.74	薬学研究院	講師	松田　研一	演習	選択	一般教育演習(フレッシュマンセミナー)	ポストゲノム天然物化学入門	11	
	4	理系	一般教育演習	4.73	医学研究院	教授	谷口　浩二	演習	選択	一般教育演習(フレッシュマンセミナー)	最新医学の知識で再考する医療映画／ドラマ／小説／マンガ	16	
	4	文系	一般教育演習	4.73	大学院教育推進機構	准教授	奥本　素子	演習	選択	一般教育演習(フレッシュマンセミナー)	北海道大学を発見しよう	15	
	6	理系	一般教育演習	4.7	低温科学研究所	教授	杉山　慎	演習	選択	一般教育演習(フレッシュマンセミナー)	南極学入門－雪と氷から見た地球環境－	20	
☆	1	理系	総合科目	4.59	工学研究院	教授	藤田　修	講義	選択	人間と文化	論理的思考を「囲碁」で養い人工知能との対戦を体感してみよう	20	
	2	文系	総合科目	4.51	高等教育推進機構	助教	シュルーター　智子	講義	選択	特別講義	グローバル基礎科目（リーダーシップとチームワーク）	20	
☆	1	文系	主題別科目	4.75	メディア・コミュニケーション研究院	教授	中川　理	講義	選択	社会の認識	コンサルティング入門Ⅰ 論理思考の身につけ方	27	2020依頼
	2	理系	主題別科目	4.74	理学研究院	准教授	川本　思心	講義	選択	科学・技術の世界	北海道大学の「今」を知る	15	
	3	文系	主題別科目	4.72	メディア・コミュニケーション研究院	教授	中川　理	講義	選択	社会の認識	コンサルティング入門Ⅱ 発想転換の方法論	20	
	4	文系	主題別科目	4.71	教育学研究院	教授	松田　康子	講義	選択	思索と言語	手話と聴覚障害	18	
	5	文系	主題別科目	4.57	文学研究院	准教授	川口　暁弘	講義	選択	歴史の視座	昭和戦前期の日本政治	18	
☆	1	理系	共通科目	4.11	情報科学研究院	准教授	飯塚　博幸	講義	選択	統計学	－	51	
	2	文系	共通科目	4.09	教育学研究院	准教授	山仲　勇二郎	講義	選択	体育学B	－	50	
☆	1	文系	外国語科目	4.68	メディア・コミュニケーション研究院	助教	堀　晋也	講義	必修	フランス語Ⅰ	－	16	
	2	文系	外国語科目	4.62	メディア・コミュニケーション研究院	教授	GAYMAN JEFFRY JOSEPH	講義	必修	英語Ⅰ	－	28	
	3	文系	外国語科目	4.58	メディア・コミュニケーション研究院	教授	楊　彩虹	講義	必修	中国語Ⅱ	－	10	
☆	1	文系	外国語演習	4.71	メディア・コミュニケーション研究院	教授	楊　彩虹	演習	選択	中国語演習	C1：あなたが主役　演じる入門中国語	10	2019依頼
	2	文系	外国語演習	4.69	メディア・コミュニケーション研究院	教授	GAYMAN JEFFRY JOSEPH	演習	必修	英語技能別演習	中級：発信型	15	
	3	文系	外国語演習	4.67	文学研究院	准教授	コーカー　ケイトリン　クリスティン	演習	選択	英語演習	中級：舞踊学	10	
	4	理系	外国語演習	4.39	理学研究院	教授	松王　政浩	演習	選択	英語演習	中級：科学ジャーナリズムの英語	13	
	5	理系	外国語演習	4.29	医学研究院	助教	伊　敏	演習	選択	英語演習	中級：医学の英文献を読む	14	
☆	1	理系	基礎科目	4.65	工学研究院	准教授	久保田　浩司	講義	必修	化学Ⅱ	－	24	2021依頼
	2	文系	基礎科目	4.47	文学研究院	教授	宮内　泰介	講義	必修	人文・社会科学の基礎	人文科学入門Ⅱ	53	
	2	理系	基礎科目	4.47	理学研究院	教授	坂井　哲	講義	必修	線形代数学Ⅰ	－	18	
	4	理系	基礎科目	4.43	理学研究院	准教授	浜向　直	講義	必修	微分積分学Ⅰ	－	23	
	5	理系	基礎科目	4.41	理学研究院	准教授	小林　厚志	講義	必修	化学Ⅰ	－	42	
	6	理系	基礎科目	4.39	理学研究院	准教授	浜向　直	講義	必修	微分積分学Ⅰ	－	30	
	7	理系	基礎科目	4.38	電子科学研究所　附属社会創造数学研究センター	助教	奥村　真善美	講義	必修	微分積分学Ⅱ	－	43	

☆　：今年度のベスト・エクセ レント・ティーチャー表彰者
□　：今年度の「授業内容・工夫等」執筆依頼者

※「所属部局名」「職名」は、令和4年度授業実施時点のものを記載

◎授業科目区分毎の授業アンケート実施者数（延べ）

一般教育演習	113 名
総合科目	40 名
主題別科目	112 名
共通科目	25 名
外国語科目	110 名
外国語演習	217 名
基礎科目	179 名
合同科目	12 名
日本語に関する科目	10 名
計	818 名

一般教育演習（ﾌﾚｯｼｭﾏﾝｾﾐﾅｰ）

牧場のくらしと自然・冬季編

北方生物圏フィールド科学センター　河合　正人

■シラバス

科目名 Course Title	一般教育演習(ﾌﾚｯｼｭﾏﾝｾﾐﾅｰ)[Freshman Seminar]		
講義題目 Subtitle	牧場のくらしと自然・冬季編[Livestock Farm Environment & Production in winter]		
責任教員 Instructor	河合　正人 [KAWAI Masahito] (北方生物圏フィールド科学センター(静内))		
担当教員 Other Instructors			
科目種別 Course Type	全学教育科目(一般教育演習)		
開講年度 Year	2022	**時間割番号 Course Number**	
期間 Semester	2学期	**単位数 Number of Credits**	2
授業形態 Type of Class	演習	**対象年次 Year of Eligible Student**	1～
対象学科・クラス Eligible Department/Class	基礎 1-53 組		
ナンバリングコード Numbering Code	GEN_LIB 1000		
大分類コード・名 Major Category Code, Title	GEN_LIB General Education_Liberal Arts		
開講部局	全学教育(教養科目)		
レベルコード・レベル Level Code, Level	1 全学教育科目(語学上級科目、高年次対象科目を除く)		
中分類コード・名 Middle Category Code, Title	0 一般教育演習(フレッシュマンセミナー)		
小分類コード・名 Small Category Code, Title	0 一般教育演習(フレッシュマンセミナー)		
言語コード・言語 Language Code, Language Type	0 日本語で行う授業		
実務経験のある教員等による授業科目 Courses taught by teachers with practical experience	0 該当しない		
他学部履修等の可否 Availability of other faculties	1 可		
補足事項 Other Information			
授業実施方式 Class Method			

キーワード Key Words

牧場、家畜、人間活動、自然、生態系

授業の目標 Course Objectives

人が自然に働きかけて生産活動を行っている牧場での暮らしを体験し、牧場を取り巻く多様な要素から成る生態系を観察しながら、自然および家畜と人間との関わり合いについて考える。

到達目標 Course Goals

日常消費している食べ物(畜産物)が生産される過程についての理解を深め、また人間活動を取り巻く自然の多様性についても理解を深める。さらに、人間が生活するためには自然に働きかけなければならないことを認識し、自然と家畜、人間との関わりについて、自分の体験に基づいて意見を述べることができる。

授業計画 Course Schedule

日高管内新ひだか町にある北方生物圏フィールド科学センター静内研究牧場において、4 泊 5 日程度の宿泊研修を冬季に行います。同研究牧場では、耕地・草地・森林から成る 470ha の土地を用いてウシ約 150 頭とウマ約 100 頭を飼養し、「土地利用型の家畜生産システム」についての教育研究を行っています。そのフィールドを使って、次のような内容で研修を 2 月下旬～3 月上旬に実施します。

1. 牧場の仕事:牧場で毎日行われる給餌・除糞等の家畜飼養管理等を体験する。
2. 家畜全般:体重体尺測定、行動観察、ハンドリングや乗馬等を通じて大型草食家畜の生態を理解する。
3. 森林観察:和種馬を放牧している森林の植生等を観察する。
4. 土壌観察:土地利用形態の異なる土壌の特徴を観察する。
5. 野生動物:牧場内に生息する野生動物の足跡・毛・糞等の生活痕を観察する。
6. グループ学習:5~6 名の班単位でフィールド研修の内容を深める討議・作業を毎日行い、最終日に研修成果を発表する。

準備学習 (予習・復習)等の内容と分量 Homework

成績評価の基準と方法 Grading System

フィールド研修・グループ学習に対する姿勢(40%)、班単位での研修成果の発表内容・発表態度(30%)およびレポート(30%)を総合して評価します。

有する実務経験と授業への活用 Practical experience and utilization for classes

他学部履修の条件 Other Faculty Requirements

テキスト・教科書 Textbooks

講義指定図書 Reading List

参照ホームページ Websites

http://www.fsc.hokudai.ac.jp/center/shizunai/, http://www.fsc.hokudai.ac.jp/lf/

研究室のホームページ Websites of Laboratory

http://www.fsc.hokudai.ac.jp/lf/

備考 Additional Information

本授業はすべて対面で実施します。4 泊 5 日の研修費用として 7,000 円程度が必要です(宿泊、食事代、札幌-静内間の交通費を含む)。

■授業の取組・工夫等について

①授業の目的・内容

一般教育演習「牧場のくらしと自然・冬季編」では、夏季休業中に実施している「牧場のくらしと自然・夏季編」とともに、本学に入学して間もない1年生を対象に、まずは北海道らしい風景のひとつとも言える「牧場」での暮らしを体験してもらう。その中で、牧場周辺を取りまく生態系を観察し、生態系を構成している多様な要素を肌で感じ、自然、野生動物および家畜とヒトとの関りについて考え、さらに自分たちの普段の生活についても考える。

授業は、北方生物圏フィールド科学センター静内研究牧場において行なう、4泊5日の宿泊研修である。静内研究牧場は、耕地・草地・森林から成る470haの土地を用いて肉用牛約150頭と馬約100頭を飼養する「土地利用型の家畜生産システム」についての教育研究を行う施設であり、そのフィールドを使って、冬季編は2月下旬～3月上旬に（夏季編は8月下旬～9月上旬）研修を実施している。中心となるのは、毎日行われる給餌・除糞等の家畜飼養管理等を体験することで牧場の仕事を理解し、飼養する家畜の体重や体尺測定、行動観察、ハンドリングや乗馬等を通じて、大型草食家畜の生態を理解することである。また、馬の放牧地として利用している森林の植生や、放牧地、採草地、飼料畑といった土地利用形態の異なる土壌の特徴、さらには牧場内に生息する野生動物の足跡・毛・糞等の生活痕を観察する。こうした日々の体験について、5~6名の班単位でフィールド研修の内容を深める討議・作業を毎日行い、最終日には班ごとに研修成果を発表する。

②授業実施上の取組・工夫

講義タイトルにもある「牧場」での授業であるから、当牧場で飼養している肉用牛（日本短角種）と馬（北海道和種）を用いた体験授業が中心となるが、見るだけでなく実際に触れる、ウシを追い、ウマに乗ることで、非日常を学生に体験してもらう。また放牧地や草地、森林に棲む昆虫や鳥、川に棲む魚、キツネやシカとの出会いから、同じ命でありながら野生動物と家畜との違いについても考え、さらに自分たちが実習したウシの肉を食べながら議論することで「食」について興味を持つようにもなるだろう。座学は必要最低限でフィールドワーク中心とし、説明や解説も極力フィールドで行なうことにしている。

一番の工夫は、牧場での授業にも関わらず、畜産分野以外を専門とする様々な分野の専門家を講師として毎回招いていることである。畜産分野ではエサとして捉える植物は草地や森林生態系を構成する重要な要素であり、土壌はそれらを支え、そこには野生動物が生息している。同じ家畜の行動観察を、畜産学者と動物心理学者が行なうと、共通部分とともに異なる部分が複数あらわれ、様々な解釈ができるようになる。こうした「植物」「土壌」「野生動物」といった分野から家畜生産の場としての「牧場」を見ながら、家畜の行動を「畜産」と「心理」の両面から評価することで、多角的な物事の捉え方を実感し、興味を広げ、学びを深めてもらいたいと考えている。

③その他

宿泊・共同生活しながら日々体験した授業やフィールドワークで出てきた感想や疑問など、毎晩夕食後に設定しているグループ学習の時間帯の中で、全員に（履修学生だけでなくTAの院生も教員も含めて）1分間スピーチをしてもらうことにしている。人前で毎日必ず

話すことで、それが苦手な学生も得意な学生も、日々その表現が変化し、成長することが見て取れ、かつ他の学生の意見や感想を聞くことで、元々各自が持っていた考え方にも変化がみられ、多角的な物事の考え方につながるのではないだろうか。また、講義の集大成として最終日に行なう班ごとの「発表会」では、テーマは与えず自分たちで考えさせ、さらに発表方法も自由としている。あえてパワーポイントや PC でのプレゼンをさせないことで、模造紙に絵を描き、紙芝居を作り、人形劇や寸劇、漫才やコントなど、自分たちが授業で学んだことを「聞かせる」のではなく、「興味を持ってもらえる」「聞いてもらえる」プレゼントとはどのようなものか、を自由な発想で表現できるようになる。さらに、発表後には学生同士の積極的な質問や議論が始まり、これには毎日行なってきた 1 分間スピーチの効果もあると実感している。

■学生の自由意見（良かったと思う点）

・畜産についてより深く理解することができました。
・教師との距離が近かったので質問がしやすかった
・色々なことが体験出来る点
・家畜と直接触れ合うことで、畜産という学問を身近に感じることができた。
・牛や馬に関することを座学だけでなく実際に触って体験できたこと
・実際に自分の五感を通じて自然を感じられたこと。
・非日常を全身で体験出来、様々な分野に触れることができたこと
・実際に動物と触れ合うことが出来たこと
・家畜とふれあうという非日常的で貴重な体験ができ、今後の学習、生活の糧になった
・家畜だけでなく、土壌や植物といったあらゆる分野のフィールドワークを体験できたこと。座学では絶対学べないようなことを学べてとても満足しています
・実習だけでなく、ミニレクチャーによりさらに学びを深めることができて、その分野についてもっと興味を持つきっかけになったのが良かったです。

人間と文化

「論理的思考を「囲碁」で養い人工知能との対戦を体感してみよう」

工学研究院　藤田　修

■シラバス

科目名 Course Title	人間と文化[People and Culture]		
講義題目 Subtitle	論理的思考を「囲碁」で養い人工知能との対戦を体感してみよう[Cultivating logical thinking ability and feeling AI through ″Go″]		
責任教員 Instructor	藤田　修 [FUJITA Osamu] (大学院工学研究院)		
担当教員 Other Instructors			
科目種別 Course Type	全学教育科目(総合科目)		
開講年度 Year	2022	**時間割番号 Course Number**	
期間 Semester	1学期	**単位数 Number of Credits**	2
授業形態 Type of Class	講義	**対象年次 Year of Eligible Student**	1～
対象学科・クラス Eligible Department/Class	基礎 1-53 組		
ナンバリングコード Numbering Code	GEN_LIB 1120		
大分類コード・名 Major Category Code, Title	GEN_LIB General Education_Liberal Arts		
開講部局	全学教育(教養科目)		
レベルコード・レベル Level Code, Level	1 全学教育科目(語学上級科目、高年次対象科目を除く)		
中分類コード・名 Middle Category Code, Title	1 総合科目		
小分類コード・名 Small Category Code, Title	2 人間と文化		
言語コード・言語 Language Code, Language Type	0 日本語で行う授業		
実務経験のある教員等による授業科目 Courses taught by teachers with practical experience	0 該当しない		
他学部履修等の可否 Availability of other faculties	1 可		
補足事項 Other Information			

キーワード Key Words

論理的思考、囲碁、人工知能、人間、文化

授業の目標 Course Objectives

囲碁は、極めて単純な基本ルールのみからなるものでありながら高度な論理性や全体を見渡す俯瞰力を要求されるゲームである。本講義では主に初心者を対象として囲碁の基本ルールから実戦が可能なレベルまで学ぶことを通して論理的思考力を養う。また、近年発達が著しい人工知能(AI)による囲碁ソフトとの対戦を通して、人間による思考に対し人工知能がどのようなものであるかを体感する。

到達目標 Course Goals

1. 囲碁のルールを理解し9路盤でゲームを最後まで終えることができる。

2. 囲碁のルールを理解し19路盤でゲームを最後まで終えることができる。

3. 囲碁のルールを他の初心者に説明し理解させることができる。

4. 自身の対局を記録に残し、AIによる評価を調べることができる。

5. AIとの対戦を経験し、AIがどのようなものであるか自分なりの見解を述べることができる。

授業計画 Course Schedule

本講義は、1 回のガイダンスと5回の集中講義（各回3コマ）により実施する。

集中講義は5月中旬から6月にかけて、毎週土曜日に実施する。具体的な日程

は初回ガイダンスで知らせる。

第1回　ガイダンス

第2回～4回 基本ルールの理解、7路盤による対局、

第5回～7回 実践力向上の基礎、9路盤による対局

第8回～10 回 人工知能と囲碁、13路盤による対局

第 11 回～13 回 実践力向上への人工知能活用例、19路盤による対局

第 14 回～16 回 人工知能との対局、レポート説明

準備学習（予習・復習）等の内容と分量 Homework

講義終了時にはレポートを課す。

成績評価の基準と方法 Grading System

・授業への積極的な参加姿勢

・毎回講義の最後に課すレポート

・ルールの理解と実践力向上の記録

・期末レポート（囲碁を通して体験した人工知能に対する見解）

有する実務経験と授業への活用 Practical experience and utilization for classes

他学部履修の条件 Other Faculty Requirements

テキスト・教科書 Textbooks

講義指定図書 Reading List

人工知能は人間を超えるか／松尾　豊：角川 EPUB 選書, 2015

研究室のホームページ Websites of Laboratory

http://lsu-eng-hokudai.main.jp/

備考 Additional Information

受講希望者多数の場合、基本的には初心者を優先します。

また、ガイダンスでレポートを課しその内容に基づいて受講者を決定します。

初回講義のみ 4 月中にオンラインで実施し、2 回目～16 回目は 5 月第 2 週以降に対面で実施する。

■授業の取組・工夫等について

①授業の目的と内容

【目的】

囲碁は、極めて単純な基本ルールのみからなるものでありながら高度な論理性や全体を見渡す俯瞰力を要求されるゲームである。本講義では主に初心者を対象として囲碁の基本ルールから実戦が可能なレベルまで学ぶことを通して論理的思考力を養う。また、近年発達が著しい人工知能による囲碁ソフトとの対戦を通して、人間による思考に対し人工知能がどのようなものであるかを体感する。

【内容】

本講義は、1回のガイダンスと5回の集中講義（各3コマ）により実施している。最初に基本的ルールを理解し、その後実践力向上につながる基本技術を習得し、他の受講生と実際の対局を行う。最初に小さな碁盤からスタートし徐々に大きな碁盤で対戦経験を積む。その後、講義形式で囲碁における人工知能導入の歴史や概念を学び、その後に実際に人工知能（AI）による囲碁ソフトとの対戦を経験する。本講義を通して、ゲームの展開を自由に構想しながらも論理的な思考を積み重ねる経験を積むとともに、人工知能がどのようなもので、これが囲碁の世界にどのようなインパクトを与えたか知ることができる。

②授業実施上の取組・工夫

本講義は、囲碁の総本山である日本棋院に協力をいただき実施した。これにより、囲碁の専門家であるプロ棋士を 2 名派遣いただき、囲碁の基本ルールや基本技術を受講生に指導していただいた。また囲碁 AI ソフトおよびこれを利用するための PC を導入したが、これには、フロンティア基金（北大囲碁授業応援プロジェクト）を設定し北大の卒業生や囲碁愛好家の方々から支援を頂いた。

本来囲碁は遊びの一つであり、ルールを覚え実際に対戦するとその楽しさを実感することができる。この“楽しさ”が主体的に講義に関わる最大の動機付けになり、講義を成功させるための鍵である。囲碁自体は極めて単純な基本ルールがあるだけで、そのゲームをどのように展開するか自由度は極めて大きい。その中で自分が能動的に行動を起こし良い結果（対戦で勝つこと）を得るには局面を優位に運ぶための積極的な意思と、それを実現するためのしっかりした論理的思考が必要となる。講義への動機付けが行われた状態で対戦を経験することが基本技術の習得と論理的思考能力の向上につながる。

また、このように自分の頭脳で自由に考えゲームが展開できるようになったうえで、囲碁 AI ソフトと対戦することで、人工知能というものがどのようなものかを体感することができる。囲碁に特化した人工知能の範囲ではあるが、それがどのようなもので、何ができて何ができないかを感覚として知ることができる。

講義の構成としては、座学だけでは頭に入らないため、講義の部分と実際の対局（演習）を交互に繰り返すような構成とした。１コマだけ単独で実施するとこのような実施形態をとることができないため毎週土曜日３コマを集中して実施し、３コマの集中講義を５回実施する形態とした。

③その他，他の教員の授業改善の参考となる事項 等

- 本講義では、講義内容そのものに興味を持ってもらうことが成功の鍵と考え、初回講義（ガイダンス）において簡単なレポートを課し、受講生が講義へのモチベーションをしっかり持っていることを確認した。
- 本講義では、囲碁 AI ソフトを利用することで、到達目標と到達度を受講生自身が定量的に把握できるようにした。これが、受講生の能力向上へのモチベーションに繋がった。
- コロナ禍で学生間のコミュニケーションがまだ限られていた中での講義であったが、本講義は完全に対面での実施を行い、それが受講生の満足度を高めた要因の一つでもあったと考えている。学生間や学生と教員の対面での交流の価値を改めて認識した。

■学生の自由意見（良かったと思う点）

・ほとんどの参加者が初心者であり、ルール説明から段階的に囲碁を理解したこと。
・楽しみながら学ぶことができる点。楽しいので集中できる。
・単に囲碁のルールのみを説明するのではなく、囲碁をすることによって得られる能力（論理的な思考力など）をはじめに説明されたので、その後の対局に意欲的に臨むことができた。
・プロ棋士の方を招いて授業を行うことで良質な指導を受けることができ、棋力が大きく向上した点。
・指導碁を何回もしていただけて、打つべき手や作戦の立て方を見てもらえたこと。気軽に質問できたこと。囲碁 AI の開発や仕組みについて聞くだけでなく体感できたこと。
・プロ棋士の先生の説明、対局を通して、一つ一つの手について理解を深められたこと。初学者のみの授業だったので、休み時間等に共に考える機会が多く取れたこと。また、囲碁のルールを知った上で人工知能の説明があったため、人工知能についての理解がしやすかったこと。
・プロ棋士の方にお越しいただいて、囲碁のルールを明快に教えてくださった点。
・囲碁に関するかなり実践的な知識を多数会得でき、囲碁の深みが分かるようになったこと。
・色々な人と囲碁を通して交流できる点。プロの方から囲碁を初歩から学べる点。
・囲碁について全くの素人だった自分にも、分かりやすく説明してくださったおかげで楽しく学ぶことができた。人工知能についての講義も、少し難しかったが興味深かった。
・プロの講師が実際に対局も交えて教えてくれたこと。対局の時間が長めに取られていて、多くの受講者と対局することができたこと。AI の囲碁ソフトと対局するという経験ができたこと。

写真　講義風景

科学・技術の世界

北海道大学の「今」を知る

理学研究院　川本　思心

■シラバス

科目名 Course Title	科学・技術の世界[The World of Science and Technology]		
講義題目 Subtitle	北海道大学の「今」を知る(論文指導)[Discover Hokkaido University]		
責任教員 Instructor	川本　思心 [KAWAMOTO Shishin] (大学院理学研究院)		
担当教員 Other Instructors			
科目種別 Course Type	全学教育科目(主題別科目)		
開講年度 Year	2022	**時間割番号 Course Number**	
期間 Semester	1学期	**単位数 Number of Credits**	2
授業形態 Type of Class	講義	**対象年次 Year of Eligible Student**	1～
対象学科・クラス Eligible Department/Class	基礎 1-53 組		
ナンバリングコード Numbering Code	GEN_LIB 1240		
大分類コード・名 Major Category Code, Title	GEN_LIB General Education_Liberal Arts		
開講部局	全学教育(教養科目)		
レベルコード・レベル Level Code, Level	1 全学教育科目(語学上級科目、高年次対象科目を除く)		
中分類コード・名 Middle Category Code, Title	2 主題別科目		
小分類コード・名 Small Category Code, Title	4 科学・技術の世界		
言語コード・言語 Language Code, Language Type	0 日本語で行う授業		
実務経験のある教員等による授業科目 Courses taught by teachers with practical experience	0 該当しない		
他学部履修等の可否 Availability of other faculties	1 可		
補足事項 Other Information			

キーワード Key Words

大学、コミュニケーション、図書館、取材、インタビュー、ライティング

授業の目標 Course Objectives

研究室や施設などの北海道大学の様々な「現場」に足を運び、自分の目で見、耳で聞き、手で触って、今現在の北海道大学に触れる。そしてそのことを通して、「大学」とはどのようなところかを、肌で知る。

到達目標 Course Goals

・インターネットや図書館、各種データベースなど、大学内にある様々な情報ツールの使い方を知る。

・大学は教育と研究の場であることを肌身に感じるとともに、研究者（教員）や職員たちとコミュニケーションできる力をつける。

・学友たちとグループで議論したり調査したりする力を身につける。

・研究室等を調査・取材してわかったことがらを、わかりやすく文章で表現する力を身につける。

授業計画 Course Schedule

1.ガイダンス（履修者の決定）

2.北海道大学を知るために(1)

　北海道大学や関連各種データベースの紹介

3.北海道大学を知るために(2)

　北大の特色について、図書館を事例に調査(予定)

4.北海道大学を知るために(3)

　取材体験：図書館ツアー(予定)

5.研究室訪問に向けての準備(1)

　インタビューのスキルと心構え

6.研究室訪問に向けての準備(2)

　取材先検討・企画書の作成

7.研究室訪問に向けての準備(3)

　取材と撮影の準備

8. 研究室訪問・取材

9. 取材ふりかえり

10.予備日

11.記事を書く(1)

12.記事を書く(2)

13.記事を書く(3)

14.記事を書く(4)

15.作品発表会：相互評価

準備学習（予習・復習)等の内容と分量 Homework

取材のための事前打合せ、文章を書く作業などが授業時間以外にも必要となる。

成績評価の基準と方法 Grading System

毎回の参加・グループ作業への貢献（50％）と制作された作品（50％）で評価する。

有する実務経験と授業への活用 Practical experience and utilization for classes

他学部履修の条件 Other Faculty Requirements

テキスト・教科書 Textbooks

取材先選ぶ際に以下の資料等を参考にする

『知のフロンティア　北海道大学の研究者は今』http://www.hokudai.ac.jp/bureau/nyu/frontier/

『北海道大学　研究シーズ集』http://www.mcip.hokudai.ac.jp/cms/cgi-bin/index.pl?page=contents&view_category=1419&view_category_lang=1

講義指定図書 Reading List

参照ホームページ Websites

授業の成果物は以下のウェブサイトおよび Facebook ページで公開する，いいね！Hokudai【フレッシュアイズ】https://costep.open-ed.hokudai.ac.jp/like_hokudai/article/category/fresh-eyes，Facebook ページ「いいね！Hokudai」https://www.facebook.com/Like.Hokudai

研究室のホームページ Websites of Laboratory

2021 度の成果　https://costep.open-ed.hokudai.ac.jp/news/19789

備考 Additional Information

実施形態：対面

履修者は 30 名限定。第 1 回目のガイダンスののち、事務で抽選を行います。

なお、新型コロナ対応のため、初回ガイダンスをオンラインで実施する場合は、ELMS の授業グループ（科学・技術の世界　北海道大学の「今」を知る）に視聴アドレスを掲載します。また、「授業計画」に記載してある構成から変更して実施する可能性があることをご了承ください。

■授業の取組・工夫等について

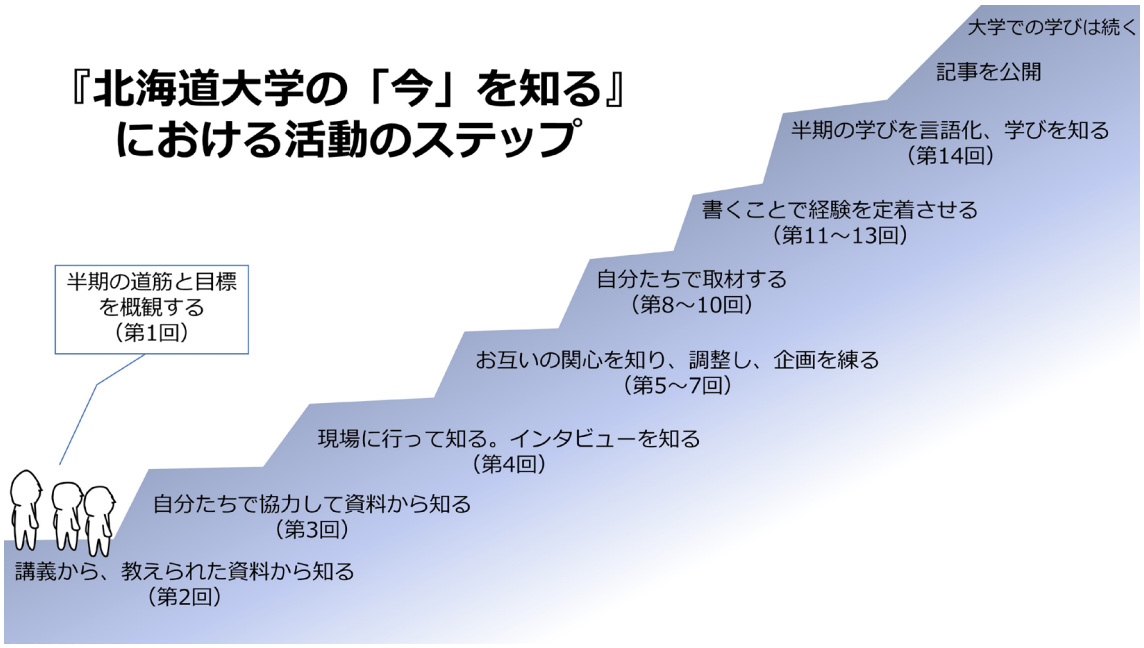
①授業の目的・内容

4 月、大学に集まった 1 年生がまとう緊張感と期待感。それを浴びて私たち担当教員はまた 1 年が始まると気を引き締めます。大学 1 年生にとって、この時期は大学を知り、今後の学びの指針を確立していく上で大切です。そのため、本授業では大学とはどういう場所であるのか、そこでどう学ぶかを、実践を通して学ぶプログラムを提供しています。授業は基本的に科学技術コミュニケーションの考えを背景に設計しています。

具体的には、学生は 6 名 1 組となり、北大の教職員等を取材し、記事を執筆し、実際に Facebook ページ「いいね！Hokudai」で公開します。5 名の教員（川本思心・池田貴子・古澤正三・原健一・福浦友香）は取材や執筆に向けて適宜講義を行い、また 1 グループに教員が 1 名付き、彼らの主体的な活動をサポートしていきます。

②授業実施上の取組・工夫（学習意欲増進、授業内容理解、学生参加促進、成績評価等）

取材という明確な目標をつくり、それに向けて学習内容を順序良く組み立てています。また、活動は常に写真に記録しています。そして授業用の slack を作り、適宜学生や教員が書き込みをしていきます。これらは振り返りの材料になります。授業は以下の流れで実施しています。



１）練習としての博物館取材

まず、6 名からなる学生グループは、博物館に関するタイムアタッククイズに挑みます。なぜ博物館か。それは大学の学習資源として極めて重要だからです。このワークではグループメンバーは分担して資料やインターネットを使い、博物館について調べます。これを通して自然とチームビルディングが行われます。

その翌週は、実際に図書館を見学します。その後、教員と博物館スタッフが学生の前で模擬インタビューをし、さらに学生も質問をします。これは今後自分たちが行う取材の予行演習として位置付けています。

２）企画

学生たちは、各種ウェブサイト、さらには自分が今受けている授業などから取材先候補を集めます。そして、グループメンバーで議論をして絞り込んで行きます。この際、大事なことは、その研究者に何を聞きたいか、といった具体的な内容・質問だけではなく、そこから何を学び、何を誰に伝えたいか、ということも意識してもらいます。

決定した後は、取材準備を進めます。教員はインタビューや記事の書き方といった講義をします。学生は取材先への取材計画を立てます。単なる QA ではなく、相手のことを学び、問いを立て、それを確かめるといったスタンスで挑むことが重要だと意識付けをしています。

３）取材

取材は学生が行い、教員は基本的にサポートしません。はじめは緊張している学生も、インタビューが進むにつれ取材を楽しむようになっていきます。もちろんうまくいくことばかりではなく、取材後の振り返りでは反省のコメントが多くなってしまいます。しかし、できたことについてもしっかり言語化することを促します。

４）執筆

取材音声は文字起こしをして、それを元に記事を作成していきます。その際、メンバーで良く議論し、何を削り、何を残すかを決めなくてはいけません。記事執筆とは単なる書き起こしではなく、そこからの主体的な活動であり、書き手が責任をもたねばならないことがこれを通して意識されます。

５）振り返り

最後取材が終わり、残り回数が 2 回ほどになった頃に、振り返りへの意識をさせます。振り返りの材料は既に述べた通りですが、各自で行うのではなく全体で共有することで学びを最大化しています。振り返りは最終回に行います。

③その他、授業改善の参考など

本授業は 2010 年から開始しましたが、概ね現在の体制と内容になったのは 2016 年からです。その後 2016、17、18、19、21 年にエクセレント・ティーチャーに選出して頂いています。本授業は学生 30 名に対して教員 5 名・TA1 名という体制で実施しています。このような体制は、学生への細やかな学習サポートを実現するだけではなく、授業改善にも効果的です。担当スタッフは授業の直後、毎回 30 分ほどのミーティングを行っています。ここで、学生の特性に合わせた対応のあり方、進行状況の確認と調整、授業の改善点などを話し合います。これにより、他のスタッフの経験を共有し、さらに改善のサイクルを早くまわすことが可能になっています。

■学生の自由意見（良かったと思う点）

・大学の研究者に実際にお話を伺う機会を授業で作ってもらえるというのは貴重だと思った。
・グループワークによって班の人と話し合ったり意見を聞きあったりして記事を深めていけたのがすごく楽しかった。
・他の授業では受動的に受けとることが多いが、この授業は自分たちで考えることが多くいい経験になった。
・学生が主体的に授業に取り組めるという点で非常に良かったと思う。グループワークでそれぞれ自分達が取材をしたいことについて発言しあえるのが良かった。
・自分で考える力、他者と協力して成し遂げる力、行動に移す力など本当に多くの重要な力を無理なく少しずつ段階を踏んで高めていけたなと思います。
・先生方が主体となって学生の活動を促していた点。
・5，6 人のグループに教員が一人ずつついてサポートしてくれるのが贅沢だと思う。先生がみな明るくて面白い人だった！本を読んで文章を書くという活動とはベクトルの違う、人との関わりの中で学んでいくスキルというものを、楽しみながら身につけることが出来た。
・毎回の授業が楽しいと感じられたこと。多様な考え方を持った異なる学部の生徒とも交流でき、同じ班の仲間たちと協力して記事執筆ができたということ。良い記事を書くにはどうすればよいのか自分なりに考えるという経験ができたこと。
・今まさに行われている研究について知ることができたこと

統計学

情報科学研究院　飯塚　博幸

■シラバス

科目名 Course Title	統計学[Statistics]		
講義題目 Subtitle	[]		
責任教員 Instructor	飯塚　博幸 [IIZUKA Hiroyuki] (大学院情報科学研究院)		
担当教員 Other Instructors	山本　雅人[YAMAMOTO Masahito](情報科学研究院)		
科目種別 Course Type	全学教育科目(共通科目)		
開講年度 Year	2022	時間割番号 Course Number	
期間 Semester	2学期	単位数 Number of Credits	2
授業形態 Type of Class	講義	対象年次 Year of Eligible Student	1～
対象学科・クラス Eligible Department/Class	基礎 24,25 組		
ナンバリングコード Numbering Code	GEN_LIB 1740		
大分類コード・名 Major Category Code, Title	GEN_LIB General Education_Liberal Arts		
開講部局	全学教育(教養科目)		
レベルコード・レベル Level Code, Level	1 全学教育科目(語学上級科目、高年次対象科目を除く)		
中分類コード・名 Middle Category Code, Title	7 共通科目		
小分類コード・名 Small Category Code, Title	4 統計学		
言語コード・言語 Language Code, Language Type	0 日本語で行う授業		
実務経験のある教員等による授業科目 Courses taught by teachers with practical experience	0 該当しない		
他学部履修等の可否 Availability of other faculties	1 可		
補足事項 Other Information			
授業実施方式 Class Method			

キーワード Key Words

平均, 分散, 標準偏差, 確率変数, 確率分布, 母集団, 標本, 標本分布, 点推定, 信頼区間, 仮説検定

授業の目標 Course Objectives

統計学は、データをどのように分析し、それに基づいてどのような判断をくだしたらよいかを論ずる学問であり、あらゆる実証研究に関わる人の方法的基礎となっている。実社会においても、意思決定におけるデータ情報の重要性が認識されており、統計的なものの考え方や統計手法を実践する必要性は非常に高まっている。本講義により、統計的なものの考え方を理解し、統計手法の適切な使用法の基礎を身に付けることを目標とする。

到達目標 Course Goals

データ解析のための基礎的な統計手法に基づいて，データからの情報を引き出し，判断や意思決定を行う手続きができるようになるため，具体的に以下を到達目標とする。

1．記述統計の基礎：統計データは数字の集まりであり，そのまま眺めていても全体の傾向は見えてこないが，統計データの記述・整理（平均値，グラフ化などの統計処理）を行うことにより，データの特徴や傾向を把握することができる。

2．確率変数と確率分布：統計的推測においては、統計データの発生メカニズムについて、確率的な要素を含むモデルとして定式化を行う。この定式化のために必要不可欠な確率変数について、様々な具体例を用いながら、確率計算・モーメント特性の把握などを行うことができる。

3．推測統計の基礎：統計的推測とは、サンプルデータに基づいて母集団分布に関する推測を行うことである。統計的推測には、母集団分布の特性値を推定するための方法（統計的推定法）と母集団分布に関する仮説を検証するための方法（統計的検定法）がある。

授業計画 Course Schedule

1．ガイダンス，データの整理と記述（データの全体像）
2．データの整理と記述（データの特性値）
3．確率の基礎
4．条件付き確率とベイズの定理
5．確率変数
6．離散確率分布
7．連続確率分布
8．多次元確率分布
9．中心極限定理
10．標本分布
11．点推定
12．区間推定
13．仮説検定（母集団平均に関する検定）
14．仮説検定（母集団平均の差に関する検定）
15．期末試験

準備学習（予習・復習)等の内容と分量 Homework 以下の要領で予習・復習して統計学の理解を深めて下さい。 ・教科書・参考書・配付資料などにある練習問題などに沢山チャレンジして下さい.
成績評価の基準と方法 Grading System 期末試験と講義の課題に基づいて, 次のように評価します。 A＋:95－100, A:90－94, A－:85－89, B＋:80－84, B:75－79, B－:70－74, C+:65－69, C:60－64, D:50－59, D－:0－49, F:学修成果を示す評点無し
有する実務経験と授業への活用 Practical experience and utilization for classes
他学部履修の条件 Other Faculty Requirements
テキスト・教科書 Textbooks 初回講義で指定予定
講義指定図書 Reading List 統計学入門 / 東京大学教養学部統計学教室編／東京大学教養学部統計学教室:東京 : 東京大学出版会, 1991
参照ホームページ Websites
研究室のホームページ Websites of Laboratory
備考 Additional Information 履修者数と教室収容人数によっては対面講義を行うことがある.

■授業の取組・工夫等について

①授業の目的・内容

統計学は、データの扱い方を学ぶ科目です。データの特性を理解する記述統計から、推定と検定の考え方の基礎を学ぶことを講義の目標にしています。統計学はデータを扱うあらゆる分野において、不可欠な考え方です。しかし、学生が実際に統計学で習ったことが必要であると感じ始めるのは、研究などでデータを自分で集め始める大学４年生以降のように思います。そのため、学んだことを基礎に実際に使ってみるまで少し時間が空いてしまいます。使わなければ忘れてしまうことは仕方のないので、講義では、基本的な考えの

組み立て方を学生に残るように願いながら、考え方を重点に講義を行っています。そして、後々、学生自身で必要であると感じたときに、自分で専門書を読み学ぶことができるための基礎学力を身に着けることを目的としました。

②授業実施上の取組・工夫

コロナの影響で、オンラインでの講義同時配信、録画した講義の編集とアップロードなど、一連のハイフレックス、オンデマンド講義に必要なスキルが我々には蓄えられました。コロナの影響も軽くなり、基本的には対面授業を行いましたが、体調の悪い学生用にオンラインでの同時配信とオンデマンド配信はずっと続けました。必要に応じて復習をする学生にとっては、十分効果的であったと思います。

講義の構成としては、最初の 15 分から 20 分程度を費やして先週の復習を行い、休憩として後述する簡単な研究の紹介を行っています。その後、50 分程度で新しい内容についての講義を行い、残りの時間を使って講義に関する演習問題に取り組んでもらいます。演習時間をもってとってほしいという要望もあり、できるだけ時間を割けるように努力しています。宿題にしてしまうということも考えられますが、宿題では取り組まない学生も出てくるため、講義で完結するようにしています。

私の担当する統計学の講義は、多くが大学 1 年生です。大学 1 年生にとって基礎学力として学ぶ基礎科目は非常に重要ですが、学生にとっては高校の延長のように思え、目新しいものではないように思います。そのため、教科書通りの基礎知識だけを教えてしまうと、学生が何のためにこの講義を学んでいるのかを見失ってしまうと考え、毎回の講義で私の研究で関連がある研究内容を同時に伝えるようにしました。まずは研究内容の面白さを端的に伝え、その後その背景にある研究結果の論拠となるデータの扱いについて簡単に紹介しています。そうすることで、学生が将来行うであろう研究領域においてどのようなことが必要とされるのかを想像できるように心掛けました。

2 項分布を正規分布で近似することができることを理解することができるゴルトンボードを実際に触れてもらうことも好評でした。一つ一つの小さなボールがどこに行くは全くわからないのに、全体としてはきれいな分布が形成され、数式に合うことが実体験できます。理論が実証されることを目の前で見て感じられることが良かったように思います。

残念ながら統計学は人気の講義ではありません。学生の興味を関連内容で保ちつつ、考え方の面白さをわかるように努力しました。

■学生の自由意見（良かったと思う点）

・毎回、授業の序盤に AI に関する雑談が行われたが、とても興味深いものであった。
・非常に良心的な解説がなされていたと思います。
・授業最初の雑談が面白かった。
・授業最初に研究に関わるコラムが紹介され興味が湧いた。
・研究の紹介が興味深かった
・スライドが見やすかったところ
・とにかく説明がわかりやすかった。確率だとかそういうものに抱いていた苦手意識を取り除いてくれる講義であった。
・授業に関連した道具をいじれて楽しかった。
・毎回小テストがあって復習できるところ、大学の研究などについて聞けたこと。
・難解なテキストの内容が分かりやすく解説されていた点
・授業後の小テストにより復習できる点。
・授業資料が Moodle で示されていたので復習しやすい

フランス語Ⅰ

メディア・コミュニケーション研究院　　堀　晋也

■シラバス

科目名 Course Title	フランス語Ⅰ[French I]		
講義題目 Subtitle	[]		
責任教員 Instructor	堀　晋也 [HORI Shinya](大学院メディア・コミュニケーション研究院)		
担当教員 Other Instructors	三浦　なつみ[MIURA Natsumi](外国語教育センター)		
科目種別 Course Type	全学教育科目(外国語科目)		
開講年度 Year	2022	**時間割番号 Course Number**	
期間 Semester	1学期	**単位数 Number of Credits**	2
授業形態 Type of Class	講義	**対象年次 Year of Eligible Student**	1～
対象学科・クラス Eligible Department/Class	仏語 01 組		
ナンバリングコード Numbering Code	GEN_LIB 1420		
大分類コード・名 Major Category Code, Title	GEN_LIB General Education_Liberal Arts		
開講部局	全学教育(教養科目)		
レベルコード・レベル Level Code, Level	1 全学教育科目(語学上級科目、高年次対象科目を除く)		
中分類コード・名 Middle Category Code, Title	4 外国語科目Ⅱ		
小分類コード・名 Small Category Code, Title	2 フランス語Ⅰ		
言語コード・言語 Language Code, Language Type	0 日本語で行う授業		
実務経験のある教員等による授業科目 Courses taught by teachers with practical experience	0 該当しない		
他学部履修等の可否 Availability of other faculties	2 不可		
補足事項 Other Information	仏語 1 組		

キーワード Key Words

フランス語、フランス語入門、フランス語圏、フランス文化

授業の目標 Course Objectives

フランス語はオリンピックや郵便の公用語であり、フランスだけでなく、アフリカや北米などをはじめ世界中に散らばるフランス語圏には、多くのフランス語話者が存在します。

授業では，その後引き続き学習する上で必須となるフランス語の入門的な知識を身につけ、理解する(聴く・読

む)、表現する(口頭や筆記で説明する，やりとりする)といったコミュニケーションの基礎をバランスよく身につけることを目指します。またさらにフランス語圏の文化についてのある程度の知識を身につけることも視野に入れます。

フランス語Ｉでは「実用フランス語技能検定試験」(フランス語教育振興協会)の5級レベル程度到達を目標とします。

到達目標 Course Goals

文法，練習問題，口頭練習、作文，講読など様々な活動を通して、次のことができるようになることが目標です。

・ スペルと発音の関係が分かり、単語，文の発音が正しくできる。

・ 単なる知識だけではなく，教科書の音声を活用し、「テキストを見ながら聴く」→「発音する」→「見ないで聴く」→「見ないで言ってみる」→「書いてみる」などの作業を反復して行うことにより、見て分かる，聞いて分かる，書けるようになる。

・ 日常的な基本的な会話ができる。

　自己紹介ができる

　好き嫌いや趣味についてやりとりできる

　買い物ができる

　人や物を形容することができる

　レストランで注文することができる

・ 以上の内容に伴う文法事項を理解し，運用することができる。

　基本動詞の活用(現在形)

　疑問文，否定文の作り方

　男性名詞・女性名詞と冠詞

　形容詞・副詞の比較級、最上級

など。

・ 簡単な応用作文ができる。

・ 辞書を引いて簡単な文の意味を取ることができる。

授業計画 Course Schedule

週２回の授業を２人の教員が担当し、連携しながら、教科書に沿った基本的な文法の説明と会話練習を中心に授業を進めます。１学期の最初は特に時間をかけて声を出して発音練習を行います。また、「使える言語」にするための語学の学習方法を学びます。

具体的には、以下のように展開します。

1. アクサン記号などの綴り字の説明、スペルと発音の関係について学びます。

2. 発音練習をかねて、最初の 3 課までは自己紹介を中心とした文法と会話を学習します。名前、職業、好き嫌い、年齢などを、相手とやりとりできるようにします。その後は疑問詞を学習し、やりとりの幅を広げていきます。

3. 練習問題や発音練習によって文法事項を身につけます。

4. 辞書を引くのに慣れ、「読む」練習をするために、教科書の簡単な物語(テツオ物語)を読みます.

5. ２人の教員はそれぞれに試験を行いますが、それに加えて、学期末には「フランス語統一試験」を行って、1学期全体の到達度をはかります。

準備学習（予習・復習)等の内容と分量 Homework

履修者は積極的かつ主体的な学習を求められます。

フランス語の発音は難しいといわれていますが、実はスペルは基本的に一通りの読み方しかありません。それを最初の頃にしっかりと練習して飲み込めば、後の学習が非常に楽に進みます。教科書の出版社のホームページから教科書の音声をダウンロードできますので、それをつねに聴くように心がけ、初期の頃からしっかりと発音練習をしてください。

「使える言語」にするためには、ただ単に知識を入れるだけではなく、耳も口も駆使して「体得」しなくてはなりません。そのためには、後でまとめて覚えるのではなく、その都度、学習したことを丸暗記するつもりでのぞみ、準備学習とりわけ復習に時間をかけて次の授業に備えてください。

具体的には、ダウンロードした教科書の音声を、「テキストを見ながら聴く」→「発音する」→「見ないで聴く」→「見ないで言ってみる」→「書いてみる」などの作業を反復して行うことにより、表現と発音をしっかりと身につけ、「使える言語」まで高められるようやってみましょう。

準備学習への取り組み方全般については、学期初めに担当教員から説明があるほか、各回の授業で求められる準備学習の具体的内容については、学期中随時教員から指示があります。

また履修者が自ら主体的に計画と目標を立て、自律的に準備学習に取り組むことが強く期待されます。

準備学習を十分に行わなければ、身につけるべき内容を消化できず、単位も修得できなくなる可能性があります。真剣かつ計画的に取り組んでください。

成績評価の基準と方法 Grading System

成績評価は、「学修成果の質」（到達目標の達成度）に応じて行います。学習態度の積極性（授業への取り組み、課題提出・小テスト、オンラインによるミニテスト等を含む平常点）50%、達成度を測る統一試験 50%とします。

最終的な評価（「A+」から「F」までの 11 段階）においては、成績に極端な偏りがないよう十分配慮します。

有する実務経験と授業への活用 Practical experience and utilization for classes

他学部履修の条件 Other Faculty Requirements

テキスト・教科書 Textbooks

テツオ、ただいま修業中／長野督、竹中のぞみ：白水社

講義指定図書 Reading List

参照ホームページ Websites

研究室のホームページ Websites of Laboratory

備考 Additional Information

オンライン授業の可能性もあります。進め方の詳細は対面授業ならびに、Glexa や ELMS で案内します

「辞書、参考書等は最初の時間に紹介します。
なお、フランス語Ⅰは週2回とも日本人教員が担当するので、興味のある学生はフランス人ネイティブ教員担当のフランス語演習（C1）等も併せて受講することをお勧めします（授業はほとんどすべてフランス語だけで行われます）。
語学の上達は時間と密度に比例します。演習で「耳」と「口」の実践的なトレーニングを積み、かつフランス語Ⅰではなかなか増やせない日常的な語彙を習得することによって、いっそうのコミュニケーション能力アップを目指してください。」

■授業の取組・工夫等について

①授業の目的・内容

フランス語Ⅰでは、文法とコミュニケーションのパートに分かれた全クラス共通の教科書を使用し、１週間に２コマの授業を２名の教員が分担する。講読やネイティブ教師とのコミュニケーションが中心となる演習の授業を念頭に置いて、基本的な文法と語彙の習得、口頭でのコミュニケーションの基礎を身につけることが目的となっている。

②授業実施上の取り組み・工夫

私は外国語教育学を専門とし、特に学習者の動機づけ、自律学習、複言語・複文化能力の養成に関心を持って研究を行ってきた。授業実践においてはこれまでの研究で得られた知見を可能な限り盛り込んできた。本稿で紹介するのはその一部である。

○学生の発音、発言の機会を増やす

毎回の授業で学生に少なくとも４、5 回は発音、発言する機会を提供してきた。説明はなるべく５分以内に収め、発音練習に移る。文法や練習問題の解説でも最初から答えを提示しない。英語も含めた既習事項をヒントとして提示しながら推論、考察を促し、発言させてきた。そのためには発言しやすい雰囲気作りが重要であり、学生との接し方には常に留意していた。次に紹介するコメントペーパーでのやり取りもその一端である。

○コメントペーパーを通じたインタラクション

自分がポイントだと思った部分、感想、質問、紹介してほしいコンテンツのリクエストについて記述を求め、それに対して毎回コメントをつけて返却した。演習を含めた他のクラスでも実践しており、１週間で約 150 枚のコメントはかなりの負担であった。

しかし、それを補って余りある効果が得られたことを実感できた。興味深い記述は次の授業で紹介していたが、それを動機として毎回工夫を凝らして作成する学生、授業外でフランス語、フランス文化に触れた体験を綴る学生が回を重ねるごとに増えていった。

○教室外でできることは教室外で

コロナ禍のオンライン授業用に整備された Web コンテンツをフル活用した。文法説明、

教科書の練習問題、応用の練習問題が実装されており、スマホでも取り組むことができる。そこに私自身が用意したコンテンツも実装した。特に課題や宿題として求めず、使い方のみを説明し、予習、復習としての利用を勧めるだけに留めたが、授業回数を重ねるごとに自主的に取り組む学生が増えていった。そのため教室では発音練習、コンテンツ紹介に多くの時間を割くことが可能になった。

〇学生の興味に沿ったコンテンツの紹介

語学の授業で文化や社会にまつわるコンテンツを紹介することは一般的だが、学生と私自身の「面白い」に対する感覚にズレが生じていることを年々実感している。そのことから、コメントペーパーでリクエストのあったコンテンツを紹介してきた。

③その他

私の授業では冒頭の目的に加えて、文法学習やフランスにまつわるコンテンツの紹介を通して、言語や文化の多様性への気づきを促し、それらに対する寛容な姿勢、態度を養成することも目的としていた。将来の専門に関係なくこれからの社会人に必要とされる資質であり、その養成が第二外国語教育の意義であると考えるためである。

■学生の自由意見（良かったと思う点）

・生徒からのリクエストに応えるという形で、フランスの観光地であったり、食文化であったり、映像を通して紹介することで、言語習得の場だけにとどまらない空間になっていた。コメントに毎回返答があることで、モチベーションの維持につながった。ペアワークによって、楽しく効果的にフランス語を学ぶことができた。

・発音の機会が多く練習になった。

・フランスの文化についていろいろなことを知れた

・文法や会話表現だけでなく、フランスの文化や食べ物などのことなども知ることができ、フランスに対してますます興味を持つことができた点。

・高すぎるレベルを求められることがなく、授業をしっかりと聞いて取り組めばきちんと発言できるために苦手意識や不安感が生まれなかった点。

・学生の自主性を重んじてくれた点単調な授業にならないように色々してくれた点

・glexa に授業に関連した教材があり、自律学習が容易に出来た点。

英語技能別演習

中級：発信型

メディア・コミュニケーション研究院　GAYMAN JEFFRY JOSEPH

■シラバス

科目名 Course Title	英語技能別演習[English Skill-focused Seminar]		
講義題目 Subtitle	中級：発信型[Productive Skills]		
責任教員 Instructor	GAYMAN JEFFRY JOSEPH [Jeffry Joseph GAYMAN] (大学院メディア・コミュニケーション研究院)		
担当教員 Other Instructors			
科目種別 Course Type	全学教育科目(外国語演習)		
開講年度 Year	2022	**時間割番号 Course Number**	
期間 Semester	2学期	**単位数 Number of Credits**	2
授業形態 Type of Class	演習	**対象年次 Year of Eligible Student**	1～
対象学科・クラス Eligible Department/Class	基礎 6-10 組		
ナンバリングコード Numbering Code	GEN_LIB 1681		
大分類コード・名 Major Category Code, Title	GEN_LIB General Education_Liberal Arts		
開講部局	全学教育(教養科目)		
レベルコード・レベル Level Code, Level	1 全学教育科目(語学上級科目、高年次対象科目を除く)		
中分類コード・名 Middle Category Code, Title	6 外国語演習		
小分類コード・名 Small Category Code, Title	8 英語技能別演習		
言語コード・言語 Language Code, Language Type	1 英語で行う授業		
実務経験のある教員等による授業科目 Courses taught by teachers with practical experience	0 該当しない		
他学部履修等の可否 Availability of other faculties	2 不可		
補足事項 Other Information	技-13(中級)		
授業実施方式 Class Method			

キーワード Key Words

Communicative ability, oral presentations, discussion, critiquing and evaluating, English writing structure, descriptive writing, persuasive writing, writing e-mails

授業の目標 Course Objectives

One aim of this course is to improve students' speaking and listening skills in English in order to develop their confidence and ability in conducting day-to-day conversation as well as in more formal speaking situations. Particular emphasis will be placed on the skills of pronunciation, self-expression, social interaction, and organization of ideas.

This course will include a variety of interactive activities including role plays, pair work, group discussions, games, and presentations.

The second aim is to develop students' writing skills across different genres. Particular focus will be placed upon descriptive writing, writing reviews, persuasive writing, and writing e-mails. Students will be given opportunities to create their own texts as well as to share them with others.

到達目標 Course Goals

○ To gain a critical understanding of writing across genres in the English language.

○ To gain a firm grasp of the characteristics of English writing structures

○ Improve organization of prose

○ To learn the importance of identifying one's audience in determining content and register

○ To develop students' descriptive, critical, persuasive and e-mail writing skills.

○ To develop and critically reflect on one's own writing skills and writing style.

○ To overcome one's inhibitions about speaking in English, and about the act of communication in general.

○ To improve one's ability to communicate in English using verbal expressions appropriate to genre and register in context, as well as to understand and develop non-verbal communication skills (gestures, facial expressions, etc) accompanying spoken English

○ To acquire the confidence to comfortably convey one's needs, wants and opinions through the vehicle of spoken English.

○ To enhance one's ability to identify and use communication style appropriate to context (slang, casual, formal)

○ To develop one's ability to express one's thought in sequence, using the appropriate signifiers (turn-taking, signposting)

○ To develop one's ability to present and debate in English.

授業計画 Course Schedule

Week 1 Orientation:introduction to writing in English and description of the course. Understanding the writing process. Thinking about one's own writing. Getting to know one another. Small talk.

Week 2 Getting to know one another. Small talk. Writing a paragraph: Topic sentences; Coherence and cohesion

Week 3 Expressing emotion and attitudes, non-verbal language Descriptive writing Activity: Interviewing a classmate

Week 4 Expressing emotion and attitudes, non-verbal language Descriptive writing Activity: Interviewing a classmate

Week 5 Presentations: Introducing One's Classmate

Week 6 Presentations: Introducing One's Classmate

Week 7 Expressing Agreement and Disagreement, Evaluating, giving feedback and advice (Group Evaluations of one another's presentations)

Week 8 Skills for Discussion in English　Informality versus formality in writing: Writing Thank-You E-mails

Week 9 Skills for Discussion in English Informality versus formality in writing: Writing Invitation E-mails and Responses to an E-mails invitation Techniques for good oral presentations in English

Week 10 Presentations of Book Reviews

Week 11 Organizing ideas Preparing for Group Presentations

Week 12 Organizing ideas Preparing for Group Presentations Group Presentations

Week 13 Group Presentations

Week 14 Group Presentations

Week 15 Group Evaluations of one another's presentations and Wrap-up of Class

準備学習（予習・復習)等の内容と分量 Homework

積極的かつ主体的な準備学習（予習・復習）が求められる。準備学習への取り組み方全般については、学期はじめに担当教員から説明があるほか、各回の授業で求められる準備学習の具体的内容については、学期中随時教員から指示がある。また履修者が自ら主体的に計画と目標を立て、自律的に準備学習に取り組むことも強く期待される。準備学習を十分に行わなければ、身につけるべき内容を消化できず、単位も取得できなくなる可能性があるので、真剣かつ計画的に取り組んでほしい。

成績評価の基準と方法 Grading System

Grading: The course uses a ranking system. Points are given according to an objective scale for class participation (%). Grades are then distributed according to Hokkaido University guidelines for GPA.

Evaluation will be based on weekly participation (35%), written assignments (25%), individual presentations (25%), and group presentations (15%).

Participation (35%)

All students should do their best to participate actively in English at all times. Students who participate positively

in class will receive higher marks. Students should also be prepared to make an effort to expand their communicative repertoire by pushing their comfort level in order to overcome the limitations and inhibitions engrained in their habitual communication patterns. Students who take chances in class will be evaluated highly even if their English grammar is not perfect.

Written Assignments (25%)
In addition to periodic in-class writing exercises, two types of writing tasks during the course of the semester will be assigned. 1) writing a descriptive essay, 2) writing a book review

Individual Oral Presentations (25%)
Students will be required to do two (2) oral presentations over during the semester. Students will be graded on organization of ideas, composure during delivery, clarity and impact of presentation.

Group Oral Presentations (15%)
This can be done individually, in pairs or in groups, and may incorporate quizzes, storytelling, role play, tongue twisters, or any other performance or discussion related to the course material at the time. Students will be graded on engagingness of the presentation.

有する実務経験と授業への活用 Practical experience and utilization for classes

他学部履修の条件 Other Faculty Requirements

テキスト・教科書 Textbooks

Materials will be provided in class by the instructor.

講義指定図書 Reading List

Impact 3／Richard Day, Joseph Shaules, Junko Yamanaka：Pearson

参照ホームページ Websites

研究室のホームページ Websites of Laboratory

備考 Additional Information

この授業は英語中級者（目安として TOEFL-ITP 試験の成績が 421 点以上）を主な対象者とする。

■授業の取組・工夫等について

昨年度も私の講義が学生たちに高く評価されたことを嬉しく思っています。今回評価とされた授業「英語技能別演習 中級：発信型」は Speaking と Writing の二つの技能を伸ばすことを目的とした授業であるが、ここでは主にスピーキングの方を中心に取り上げます。

まず、私が担当しているすべての英語の授業もそうなのですが、日本の高校で陥りがちな文法偏重的な考え方を再びバランスさせるために、言語は人間同士により、リアルなコミュニケーションをとるためのツールであることを学生たちに認識させようとしています。そのために、授業中に学生たちに日本語をしゃべらせない、私自身も日本語を一切使用しない、という割と厳しい条件を付けつつ、感情の面で、私が提供する様々なアクティビティに学生たちが積極的に乗れる授業の雰囲気づくりに努めています。具体的には、最初の数回の授業で、学生同士の会話、あるいは私や外国人 TA との会話・対話を促すようなアクティビティやゲームを取り入れ、お互いの「変わった」ことや面白い点を見出せるようにし、リラックスした、あまりミスを気にしなくて良いムードつくりを重視しています。

また、私自身の趣味について話したり、自分の短所について冗談をいうことにより、学生たちが気楽に私と話せるように努めています。外国人の TA が人懐こい人であれば、教室がいきなり打ち解けた雰囲気になります。学生たちは自分が中学校や高校で身に着けてきた英語能力でかなりのところまで会話ができることに気が付くと、ほっとするとともに、大きく自信がでてきた、とよく言われます。学習者の長点を伸ばすことにより、学習意欲を高める、という考え方です。

少し自信がついたところで、英語の感情表現を外国の子どもに教える、というロールプレーをさせ、発音や抑揚をオーバーに発声していただくことにより、遊び感覚でパフォーマンスの要素を楽しめるようにし、英語で会話をすることに対する固定観念を捨て、自分の殻をやぶる環境を提供します。

この演習の授業で、ペア―ワークやグループワークがほとんどの活動を占めているが、気の知れた友人やクラスメイトと一緒になり、お互いの共通の興味や関心を話したり、発表させたりすることにより、学生中心の授業を行っています。授業前半の発表では、長さや難易度を学生たち自身に決めさせることによって、身の丈にあった授業が可能になります。

授業中盤で実施するグループ発表では、完全にテーマや発表形態を学生たちに任せることにより、毎年非常に独創的で面白い発表が見られ、そのコンテンツにいつも嬉しい驚きを覚えます。一方で、事後の学生同士によるお互いの評価に、北大生の真面目さも感じずにはいられません。このようにして、授業前半に学生たちとの信頼関係性つくりにつとめ、自信をもたせると後半に Writing の詳細な点やディベイトを導入しても、学生たちは楽しくかつ真面目に取り組もうとします。

最後に、この授業には限らない話になりますが、学生全員のお名前を暗記し、彼らの個人的なことを少し覚えるようにし、名前で呼ぶようにして会話すると、最近は学期中につまずきがあっても、それを乗り越えるきっかけになったりしています。

■学生の自由意見（良かったと思う点）

・ディスカッションやプレゼンができるのはアウトプットの練習として良かった。
・先生の英語がとても聞き取りやすく、わかりやすかった。
・グループで話し合う機会が多かったが、グループ単位だと緊張せず話せたためよかった。
・クラスの雰囲気が明るく、とても楽しく参加することができました。先生が全員の名前を覚えて下さるので発言しやすかったです。
・無理難題を課されることがなかったので、前向きに取り組めた。
・積極的に英語を話す機会が与えられ、スピーキングスキルの上達を感じた。
・先生がゆっくり丁寧な発音で、わかりやすいように補足や例をつけてお話ししてくださったので、授業や課題の内容、フィードバックなどを完ぺきに理解することができて有難いと感じました。

人文・社会科学の基礎

人文科学入門Ⅱ

文学研究院　宮内泰介

■シラバス

科目名 Course Title	人文・社会科学の基礎[Basics of Humanities and Social Sciences]		
講義題目 Subtitle	人文科学入門Ⅱ[Introduction to human sciences]		
責任教員 Instructor	宮内　泰介 [MIYAUCHI Taisuke](大学院文学研究院)		
担当教員 Other Instructors			
科目種別 Course Type	全学教育科目(基礎科目)		
開講年度 Year	2022	**時間割番号 Course Number**	
期間 Semester	1学期	**単位数 Number of Credits**	2
授業形態 Type of Class	講義	**対象年次 Year of Eligible Student**	1～
対象学科・クラス Eligible Department/Class	基礎 1-53 組		
ナンバリングコード Numbering Code	GEN_FMC 1000		
大分類コード・名 Major Category Code, Title	GEN_FMC General Education_Fundamental Courses		
開講部局	全学教育(基礎科目)		
レベルコード・レベル Level Code, Level	1 全学教育科目(語学上級科目、高年次対象科目を除く)		
中分類コード・名 Middle Category Code, Title	0 基礎科目(文系)		
小分類コード・名 Small Category Code, Title	0 人文・社会科学の基礎		
言語コード・言語 Language Code, Language Type	0 日本語で行う授業		
実務経験のある教員等による授業科目 Courses taught by teachers with practical experience	0 該当しない		
他学部履修等の可否 Availability of other faculties	1 可		
補足事項 Other Information			

キーワード Key Words

グループディスカッション、人文・社会科学的なものの見方、貧困、民族、グローバリゼーション、メディア、言語、公正、社会のあり方、国家

授業の目標 Course Objectives

この講義では、主に文学部や教育学部（あるいは法学部・経済学部）へ進学しようとする者が、専門を学ぶ前の基礎となるような、人文・社会科学的なものの見方を学びます。

世界ではさまざまなことが起きています。民族紛争、貧困、モノやヒトのグローバルな動き、食料問題、などなど。私たちにとって一見遠い話も、実は私たちの生活と密接に結びついています。一方、たとえば、私たち自身が使っている「言葉」など、私たちにとって一見身近であたりまえの存在も、世界の複雑なしくみや歴史と密接に結びついています。こうしたさまざまな世界を私たちはどう理解したらよいのか、その理解のしかたをこの授業では学びます。

この授業では、教科書やその他のさまざまな素材（映像や新聞記事など）を使って学生同士で議論をします（毎回必ず議論をします）。グループディスカッションを通じて、お互い学び合い、世界を理解する視点を身につけよう、というのがこの授業の趣旨です。また、関連するテーマについて、雑誌論文・本・新聞記事などの文献・資料を探して読み、それをもとにどう議論をすればよいのか、どう文章を書けばよいのかも学びます。

こうしたことを通じ、幅広い社会問題について考え、議論し、そこから社会を見る目を養い、ひいては人文・社会科学的な視点の基礎を身につけることが目標です。

到達目標 Course Goals

この講義では、以下の 4 つの目標をかかげます。

(1)さまざまな社会的現象への関心と理解を深める

(2)人文・社会科学的な視点の基礎を身につける

(3)論理的なディスカッションができるようになる

(4)人文・社会科学の文献を読み理解する基礎を身につける

授業計画 Course Schedule

以下のテーマを、教科書やその他の素材（映像や新聞記事など）を使って考え、また、受講者同士で議論するという形をとります。グループディスカッションを毎回行います。

(1)イントロダクション：何を学ぶのか

(2)コンビニ深夜営業は是か非か

(3)過疎地における携帯電話のアンテナ建設への税金投入は是か非か？

(4)民族を考える(1)ルワンダの民族虐殺から民族とは何かを考える

(5)民族を考える(2)資料から民族とは何かを考える

(6)貧困を考える(1)貧困とは何かを資料から考える

(7)貧困を考える(2)貧困とは何かを資料から考える

(8)会社は誰のものか

(9)メディアを考える:どの記事を採用するか

(10)言葉と社会:ニューカマーの外国人に対する日本語教育の必要性を考える

(11)グローバリゼーションを考える:タイヤをめぐるグローバリゼーション

(12)累進課税を考える:公正とは何か

(13)宿題から議論する(各自探してきた雑誌論文から問題を作成しそれを議論する)

準備学習 (予習・復習)等の内容と分量 Homework

学期中 4～5 回出される宿題に取り組む、講義で配られた参考資料を読む、講義で学んだことを復習する、講義で議論したことに関連する文献を読む、など。とくに講義後、講義に関連した参考文献を自ら探し出して積極的に読み学習することが求められます。期末試験では、講義に積極的に参加し、その上で、関連文献・関連図書などで十分自主学習をしているかどうかが、問われます。

成績評価の基準と方法 Grading System

(1)講義に出席し、積極的に参加しているか(授業はディスカッション重視なので、授業への積極的な参加が求められます、(2)講義の内容を十分に理解しているか、(3)宿題等にまじめに取り組んだか、そして、(4)講義への積極的な参加と十分な準備学習によって、期末試験において講義の到達目標に応じた解答が書けているかどうか、によって成績を評価します。

上記(1)から(4)までの 4 つを総合的に判断して評価します。具体的には、授業中の積極的な取り組みと理解(30%)、宿題等(30%)、期末試験(40%)という比重で評価します。

有する実務経験と授業への活用 Practical experience and utilization for classes

他学部履修の条件 Other Faculty Requirements

テキスト・教科書 Textbooks

グループディスカッションで学ぶ社会学トレーニング／宮内泰介:三省堂, 2013

講義指定図書 Reading List

講義の中で適宜指示します。

参照ホームページ Websites

研究室のホームページ Websites of Laboratory

http://taimiyauchi.jimdo.com/

備考 Additional Information

■授業の取組・工夫等について

①授業の目的・内容

この授業は専門基礎科目の「人文・社会科学の基礎」（講義名：人文科学入門 II）という科目であり、専門へ上がる前にその基礎となるような考え方や技法を身につけてもらおう趣旨の科目です。したがって、この授業では、特定の学問や特定のテーマについて深く学ぶというより、さまざまなテーマを取り上げながら、人文・社会科学の考え方の基礎を身につけてもらう、ということを目的としています。とりあげるテーマは、貧困、民族、グローバリゼーション、株式会社、税金、社会的公正、まちづくりなどで、いずれも教科書（『グループディスカッションで学ぶ社会学トレーニング』）や新聞記事・動画（テレビ・ドキュメンタリーなど）を素材として使いながら、グループディスカッションを通して考えます。なかなか答えが出ないような「問題」を素材にしながら、考え、ディスカッションすることを通して、広く人文・社会科学的なものの考え方を身につけようという授業です。

②授業実施上の取組・工夫

講義を進めるにあたって工夫していることはいくつかあります。

第 1 に、この講義の目的や方法を常に学生に提示し、この講義で身につけてほしいものを学生に自覚してもらうようにしています。これは宿題についても同じで、何のための宿題なのかを常に提示するよう心がけています。

第 2 に、グループ・ディスカッションに多くの時間を割きます。毎回、グループディスカッションに 20～40 分を割きます。素材（教科書や動画など）を提示し、それをもとにまずは一人で考えてグループディスカッションの準備をさせ、その上でグループディスカッションを行います。そして最後にそれを可能な限り教室全体でシェアし、さらに必要に応じて、講師から短いレクチャーを行います。すぐにディスカッションを始めるのではなく、一人ひとり準備をしてからディスカッションをすることで、ディスカッションの効果も上がります。

第 3 に、効果的なグループディスカッションを行うために、(1) 坐る位置を画面で指定して、最初からグループ分けしやすい席への着席を促します（グループ分けに時間をとらない工夫です。また 2 回に 1 回の割合で席替えを行ないます）、また、(2) 議論しやすく、かつ、安易な議論に陥らないように、議論のテーマ設定を工夫し、(3) 議論で何を行うのかを明確に指示します（グループで結論を出せ、という回と、自由に議論してください、という回を明確に分けるなど）、(4) ディスカッションの手順とディスカッションのヒントを毎回ていねいに提示します。

第 4 に、LINE オープンチャットを設置し、授業の最後に各グループや各自の考えをそこに書き込んでもらって、全体で共有し、そのうちのいくつかについて口頭でも報告してもらいます。この LINE オープンチャットの活用は学生にも好評ですし、また種々の連絡手段としても使えます（専門授業では Slack を使っていますが、この講義は 1 年生の大人数の授

業なのでLINEオープンチャットを使っています)。

さらにこの授業では、5回の宿題を出し、雑誌論文・本・新聞記事を探して読むという課題の他、自分でテーマを考えてそれについて関連する 3 つの雑誌論文を探してきてそれらがそのテーマについてどう言っているかを書くという課題などを課しています。大学における勉学や研究のしかたのひな形を身につけてもらおうという趣旨でもありますし、それが期末試験へ向けた自習の基本形でもあることを学生に示すものでもあります。(期末試験は、講義でとりあげたテーマについての応用問題で、復習や自習ができているかを問うものになっています)

③その他

グループディスカッションを軸としたこのような授業の教育効果は、たいへん大きいと感じています。それは、学生同士が学びあうピア・ラーニングの効果です。いかにそのピア・ラーニングの効果を引き出すかが、どうそれを誘発し、サポートするかが教師の役割だと思っています。

■学生の自由意見（良かったと思う点）

・人文科学的な視点から物事を考える脳の使い方を覚えた、ディスカッションを円滑に進めるテクニックを会得した
・なかなか答えのでない社会問題についてグループワークを通して深く考えることができた点
・みんなで討論する形だったのでさまざまな人の意見が聞けたし、自分の考えも段々とまとめられるようになったこと。
・社会の問題をディスカッションするということがとても刺激的だった
・普段自分では深く考えることのない話題について考える、また知識を得ることができてよかった。答えのない問いに多面的に意見を出し合うということが参考になった。幅広い話題でおもしろかった。
・グループワークで自分の気がつかない発想の持ち主、自分と対立する意見の持ち主と言葉を交わすことができたこと。
・議論が必ず含まれており、人文社会科学的な視座を多少なり身につけられたと思う。
・順をおった宿題やディスカッションで困ったときの話題提起があって、慣れていない活動でも参加できて良かったです。
・少人数のディスカッションがあった点と、オープンチャットを利用して意見を共有していた点が非常に良かったです。他の人の意見を聞いたり、先生の指摘を聞いたりすることでより学びが深まりました。